

二〇一九年度深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト活動報告

弘前大学人文社会科学部 渡辺 麻里子

はじめに

弘前大学が二〇一五年（平成二十七年）に深浦町と協定を締結したことを契機として、この深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトは始まった。国立大学法人弘前大学は、地方国立大学として地域への貢献が求められているが、この協定も、地域課題への対応や、活力ある個性豊かな市民社会の形成と発展に資するため、相互に連携・協力をしていくために締結したものである。この連携協定に基づき、深浦町をフィールドにして、弘前大学と深浦町が様々な事業や活動を展開するため、「弘前大学深浦エコサテライトキャンパス」を開設することになった。「エコ」というのは、建物を建てるような活動ではなく、建物は既存のものを活用し、実際には「人」が活動する、ソフトの部分を充実させようというのが「エコ」の考え方である。

二〇一六年（平成二八年）五月二〇日に、弘前大学深浦エコサテライトキャンパスを開所し、その開校記念講演を、人文社会科学部渡辺麻里子が行うこととなった。

渡辺の専門は、日本古典文学で、仏教文学・寺院資料調査を専門とすることから、講演の題目を「深浦再発見！—円覚寺にみる宗教・歴史・文化の魅力—」とし、円覚寺を中心とした深浦町の歴史や文化を講義する計画を立てた。講演準備のために事前に深浦町を訪れ、円覚寺も訪問した。その折に、寺宝館に展示している『大般若経』以外にも多くの聖

教・古典籍があることを御教示いただき、急遽、調査を行うこととなった。

実際に調査を開始すると、調査にお訪ねする度に、続々と新たな本が現れ、結果、二千点以上にもなる貴重な典籍の所蔵が判明した。そこで二〇一六年度〜二〇一七年度にかけて、十四回の調査を実施させていただき、様々な発見があった。そこで昨年までの調査の結果を、『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』にまとめ、二〇一八年三月に刊行した。

今年度は、三年目の調査となるが、全部で十回の調査を行った。

二〇〇〇点を大きく分類し、それぞれの内容に合わせた調査を進めた。新たに判明したことを中心に、この『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第二集にまとめることとする。また本稿には、円覚寺古典籍保存調査プロジェクトとしての、二〇一九年度（令和元年度）活動報告を行う。

一、深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトによる古典籍調査

二〇一九年度は、四月から一月にかけて、深浦円覚寺所蔵古典籍について、十回の調査を行った。調査の内容は以下の通りである。

①〔第一回調査（通算第一五回）〕

二〇一九年四月六日（土）〜八日（月）

（於）深浦観光ホテル、深浦町役場会議室

今年度最初の調査は、弘前大学教員のみで、中世箱・印信箱を中心に行った。小雨で寒い日であった。今年度初回の調査として、今年度の調査方針や七月のフォーラムに向けた打ち合わせを行った。町役場が、選挙等で使用できなかったため、深浦観光ホテルに調査用の部屋をお借りして、調査を行った。

②〔第二回調査(通算第一六回)〕

二〇一九年五月一日～二日(於)深浦町役場・中会議室

中世箱・印信箱と、歴代住持関係書を対象に調査を行った。中世箱・印信関係の資料調査、書誌カード作成、写真撮影、データ入力などを行った。また歴代住持所持本の分類整理を行った。特に、尊岸・尊海関係書目について、調査およびデータ入力を行った。調査は、弘前大学教員、円覚寺関係者、木造高校深浦校舎教員、深浦町教育委員会担当者で行った。また七月に開催するフォーラムの打ち合わせや準備を行った。

③〔第三回調査(通算第一七回)〕市民・学生合同調査

二〇一九年五月三日(金)～六月三日(月)

(於)深浦町フィットネスプラザゆとり会議室

五月三十一日は、荷見守義教員が朝鮮本の調査を行った。六月一日からは弘前大学生五名に、深浦町民三名も参加、弘前大学教員三名、木造高校深浦校舎教員二名、深浦町教育委員会担当者、円覚寺関係者との合同調査で、賑やかな調査となった。深浦町役場が、行事等で使用ができなかったため、町内の別施設である、深浦町フィットネスプラザゆとりの会議室にて行った。

調査内容は、資料の目録化のための入力、資料の撮影(朝鮮本・尊岸本・印信類)や、印信の整理などを進めた。印信は、データ入力を行い、データ整理に努めた。また修験関係・歴代住持関係のカード取り(奥書転記)を行い、尊岸関係は、データ入力を進めた。また明治期版本の調査およびデータ整理も行った。また中世資料の調査を進め、書誌カードの作成を行った。最後に、七月の深浦フォーラムに向けて、展示資料の準備選定を行った。

今回、多くの大学生が参加した。参加した学生たちの感想からは、文化財に直接触れることができる、貴重な体験となっていることがうかが

われる(後述)。

④〔第四回調査(通算第一八回)〕

二〇一九年七月五日(金)～七日(日)

(於)深浦町役場三階大会議室

今回の調査では、中世資料、歴代住持資料、修験資料を中心に、調査、書誌カード取り、データ入力、写真撮影を行った。この調査に合わせて、外部研究者(法政大学小口雅史氏)が来訪され、様々な御教示をいただいた。弘前大学教員と、木造高校深浦校舎教員、円覚寺関係者、深浦町教育委員会担当者で調査を実施した。

また、七月一三日のフォーラムに備えて、深浦町役場の関係者と打ち合わせをした。さらに、フォーラムの折に行う展示の準備、展示の配置確認、展示解説の作成などを行った。

⑤〔第五回調査(通算第一九回)〕

二〇一九年八月一七日(土)～一八日(日)

(於)深浦町役場町民ホール

台風一〇号通過の後で、風が強い日であった。弘前大学教員と、深浦町教育委員会担当者、円覚寺関係者で調査を行った。

調査内容としては、中世資料・歴代収集資料・修験資料について、書誌カード取り、データ入力、写真撮影等を行った。また七月のフォーラムの後片付けをした。フォーラム時に展示に使用した資料のうち、尊岸修験関係資料の片付けを行った。

金比羅堂から新たに三〇点の資料が見つかり、その調査を行った。番号を付し、カードを取った。新たに「三宝山」という朱印が押された本も見つかった。また卷子本の別置本が見つかり、写真を撮影した。

十月の醍醐寺調査団との合同調査の準備を行い、深浦町役場教育委員

会担当者と、今年度後半の調査等について打ち合わせを行った。

⑥〔第六回調査(通算第二〇回)〕

二〇一九年九月二三日(月)～二四日(火)

(於) 深浦町役場三階小会議室

今回は、主に印信の調査を行った。内容を確認し、整理を行った。また整理番号を付し、書誌カードを取るなどした。

⑦〔第七回調査(通算二一回)〕

二〇一九年一〇月六日(日)～七日(月)

(於) 深浦町役場一階町民ホール

十月十日から実施する醍醐寺調査団との合同調査に備え、準備作業を行った。また、卷子本の調査、および義観本の調査を行い、調査カードを作成した。弘前大学教員、円覚寺関係者、深浦町教育委員会担当者が調査を行った。

⑧〔第八回調査(通算二二回)〕醍醐寺聖教調査団との合同調査

二〇一九年一〇月一〇日(木)～一五日(火)

(於) 深浦町役場・三階小会議室／三階大会議室／町民ホール

深浦円覚寺の本山、醍醐寺の聖教調査を行っている醍醐寺聖教調査団との合同調査を行った。(詳細は後述)

⑨〔第九回調査(通算二三回)〕市民参加調査

二〇一九年二月二三日(金)～一五日(日)

(於) 円覚寺／深浦町役場一階町民ホール

初日の一二月二三日は、円覚寺において、弘前大学深浦エコサテライトキャンパス特別公開講座を実施した。この公開講座については、別途後述する。

二日目、三日目は、深浦町役場において、深浦町民と共に調査を行った。弘前大学教員と木造高校深浦校舎教員、円覚寺関係者、深浦町教育委員会担当者に加え、町民が三名参加して実施した。

調査では、歴代住持の収集資料・修験資料についての書誌カード取り、データ入力、写真撮影を行った。特に撮影は、義観本を中心に、書誌カードは、尊海本など歴代住持本を中心に実施した。また朝鮮版の調査を実施し、書誌カードを作成した。さらに、二〇一九年度報告書用の補充調査を行った。

⑩〔第一〇回調査(通算二四回)〕

二〇二〇年一月一八日(土)

(於) 深浦町役場二階中会議室

今回の調査は、『深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書』第二集の刊行を直前にして、調査漏れなどの確認、撮影漏れの写真撮影を行った。また、卷子本の撮影を行った。また報告書に必要なデータを入力し、報告書の原稿校正も行った。

一月にしては全く雪が降らず、良い天気で、海も綺麗な日であった。調査は、大学教員と教育委員会担当者、深浦校舎教員で調査を行った。

以上、二〇一九年度(令和元年度)は、四月から一月にかけて、一〇回の調査を行った。

今年度の調査では、金比羅堂から見つかった本や箱入りの卷子本など、新たな本が発見された。

全体に、再度分類分けを行い、目録作成がしやすく後に整理しやすいようにした。また優先的に調査を進めるものを決めるなど、調査の方向性を固めた。特に、中世本、尊岸・義観など歴代住持本、卷子本、印信類などについては、優先的に行っていくこととし、調査作業を進めた。

印信類はある程度の整理を終え、この報告書に原克昭教員が概要を報告した。

この報告書には、一月調査までを報告するが、二〇一九年度は、二月と三月の、あと二回の調査（町民合同調査）を予定している。

## 二、二〇一九年度深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト成果報告会 （フォーラム）の開催

### （一）フォーラムの実施

二〇一九年七月一日（土）一三時～一六時三〇分、弘前大学コラボ弘大八階八甲田ホールにおいて、二〇一九年度深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト成果報告会（フォーラム）を開催した。

このフォーラムは、二〇一九年度深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト成果報告会であると同時に、弘前大学深浦エコサテライトキャンパス平成三十一年度特別公開講座でもあり、弘前大学人文社会科学部・名古屋大学人文科学研究科 学術協定締結の記念事業でもある。

深浦円覚寺調査の成果報告であると同時に、弘前の寺院や歴史について、新たな視点で学ぶ機会とした。また昨年のフォーラムは、調査成果を深浦町の皆さんにお聞きいただきたく、深浦町にて開催したが、今回は、円覚寺資料が、津軽一円の歴史を繙く鍵となる資料であることも判明し、津軽の皆さんに聞いていただけるように、弘前大学での開催としたものである。

深浦町長、円覚寺副住職、弘前大学人文社会科学部部長の挨拶の後、真言宗津軽仏教会による御法楽を行った。講演にうつり、弘前大学教職大学院教授瀧本壽史氏による「近世津軽と深浦」の講演、渡辺による「深浦円覚寺所蔵古典籍の意義―津軽の寺院における「知のネットワーク―」の講演に続き、特別講演として、名古屋大学高等研究院教授阿部泰

郎先生による「地方寺院資料が照らし出す中世宗教の世界像―聖教調査とアーカイブス化の意義とは何か―」のお話があり、弘前大学理事（社会連携担当）の閉会の辞で終了した。また当日は会場にて、円覚寺資料の特別展示も行われた。

収容予定一〇〇名の会場に、約一七〇名の来場者となり、大盛会となった。以下、詳しく報告する。

メインタイトルを「津軽における寺院資料の世界―深浦円覚寺の古典籍を基点として―」とし、円覚寺が所蔵する古典籍について、調査成果を踏まえつつ、多方面から照射することを目指した。

多くの市民に会場いただくため、チラシではその開催趣旨を、以下の様に記して、参加を呼びかけた。

弘前の寺院と歴史について、新たな視点で学んでみませんか？深浦円覚寺の古典籍調査の結果、津軽の寺院に関する、新発見がありました。このフォーラムでは、中世・近世における津軽と深浦の関係を、絵図や古文書、深浦円覚寺所蔵古典籍から考えます。また名古屋大学の阿部泰郎先生に、地方における寺院資料の意義についてご講演いただきます。津軽の歴史や寺院について、深く学んでみましょう。

主催は、深浦町、弘前大学、深浦町教育委員会、弘前大学人文社会科学部地域未来創生センターが行い、弘前市、東奥日報社、陸奥新報社に後援いただいた。また、本フォーラムは、公益財団法人青森学術文化振興財団の助成を受けて実施した。

当日のプログラムは以下の通りである。

- |        |      |                     |
|--------|------|---------------------|
| 一三時〇分  | 開会の辞 | 深浦町長 吉田満            |
| 一三時五分  | ご挨拶  | 円覚寺副住職 海浦誠観         |
| 一三時一〇分 | ご挨拶  | 弘前大学人文社会科学部学部長 今井正浩 |

一三時二〇分～一三時三〇分 真言宗津軽仏教会による御法楽（実演）

一三時三〇分～一四時二〇分

〔講演1〕 近世津軽と深浦

弘前大学教職大学院 教授 瀧本壽史

一四時三〇分～一五時二〇分

〔講演2〕 深浦円覚寺所蔵古典籍の意義

——津軽の寺院における「知のネットワーク」——

弘前大学人文社会科学部 教授 渡辺麻里子

一五時三〇分～一六時三〇分

〔特別講演〕 地方寺院資料が照らし出す中世宗教の世界像

——聖教調査とアーカイヴス化の意義とは何か——

名古屋大学高等研究院 教授 阿部泰郎

一六時三〇分

閉会の辞 弘前大学理事（社会連携担当）

弘前大学エコサテライトキャンパス所長 石川隆洋

真言宗津軽仏教会による御法楽は、八名の僧侶によって実演された。法螺貝を吹きながら僧侶たちが入場すると、会場は荘厳な雰囲気包まれた。御法楽の内容は以下の通りである。

・奠供讚・四智梵語

・九条錫杖

・般若心経

・御宝号

・回向文

はじめは「奠供讚・四智梵語」からである。法要の最初に唱える讚を「奠供」といい、今回は「四智梵語」という経を唱える。

次に、九条錫杖は、手に持った錫杖を振りながら唱える。続いて、『般若心経』を唱える。続いて、真言宗を開いた弘法大師空海を讃え、最後に回向文を唱えて終わる。法螺貝に太鼓、鉦の音が響き、普段あまり接することのない仏教法要を目の当たりにして、会場は厳かな空気が流れた。法螺貝を吹きながら僧侶たちが退場し、法楽を終えた。

聴衆は、普段は接しにくい仏教の世界を、資料や声明を通じて理解を深めることができた。法螺貝や太鼓による演奏や、経典を美しく唱える声明を実際に見て、聴いて、聴衆は美しい音色に魅了されていた。

続いて、講演にうつる。最初の講演は、弘前大学教職大学院瀧本壽史教員によるもので、「近世津軽と深浦」というタイトルで行われた。瀧本教員の専門は日本近世史である。特に北奥地域における藩政史を中心に、津軽・下北地域をフィールドとした研究を行っている。新編弘前市史、浪岡町史、青森県史など自治体史の編集・執筆を行ってきた。論文は「寛政改革と藩士土着政策」『津軽藩の基礎的研究』国書刊行会、「海峡を越える地域間交流」『列島史の南と北』吉川弘文館）など多数ある。

このように近世史が専門で、津軽の郷土史を専門にされてきた立場から、絵図や古文書をひもときながら、近世津軽と深浦の関係や、近世津軽にとっての深浦の役割についてわかりやすく解説していただいた。この講演内容は、本報告書に「特別寄稿」として掲載している。

二番目の講演は、深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトを率いる弘前大学人文社会科学部教授 渡辺麻里子が行った。前回の深浦フォーラムは、一年前の二〇一八年七月六日であったが、それ以降の調査の成果を含め、深浦円覚寺所蔵資料の意義を弘前市民に広く伝えることを目指した。

この調査プロジェクトは、深浦円覚寺の古典籍を初めて調査するもので、調査の結果、鎌倉写本や、修験関係資料など、貴重な資料が多く発見された。また修験関係資料は、修験道研究の資料として貴重であることが判明していたが、さらに今年は調査が進み、深浦円覚寺の僧侶が、最勝院、大円寺、百沢寺など、津軽一円の寺院で学んでいることがわかり、円覚寺資料が、津軽における寺院の歴史を解明するための重要な資料であること、つまり円覚寺資料は、深浦町にとってだけでなく、津軽全体にとって重要な文化財であることを、弘前市民に伝えた。

最後に、特別講演として、名古屋大学高等研究院教授の阿部泰郎先生が講演した。弘前大学人文社会科学部原克昭教員の紹介のもと、阿部氏の講演が行われた。阿部泰郎氏のご専門は日本中世文学であるが、説話文学、仏教文学、芸能、寺院資料と幅広く、著書は、『湯屋の皇后 中世の姓と聖なるもの』（名古屋大学出版会、一九九八年）、『中世日本の宗教テクスト体系』（同、二〇一三年）、『中世日本の世界像』（同、二〇一八年）など多数ある。名古屋大須観音真福寺の調査による『真福寺善本叢刊』（臨川書店）や、仁和寺の聖教調査による『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究』（勉誠社、一九九八年）は大変著名で、中世の文学世界を寺院資料の調査研究によって切り拓き、中世文学研究を領導してこられた研究者である。

本講演では、「地方寺院資料が照らし出す中世宗教の世界像―聖教調査とアーカイヴス化の意義とは何か―」という題で、これまで阿部氏が行ってきた多数の寺院資料調査の経験を踏まえ、地方における寺院資料の意義について、アーカイヴス化などの視点も交えて、幅広い観点から解説していただいた。この内容も、本報告書の特別寄稿として掲載した。

会場は、阿部泰郎先生が紹介する、他寺院の貴重資料など多くの事例に驚き、次々と披露される資料と阿部先生の熱意あふれる語り口に圧倒され、引き込まれながら、深浦円覚寺の聖教の意義について深く学び、

理解を深めた。

## （2）「三資料展観」の実施

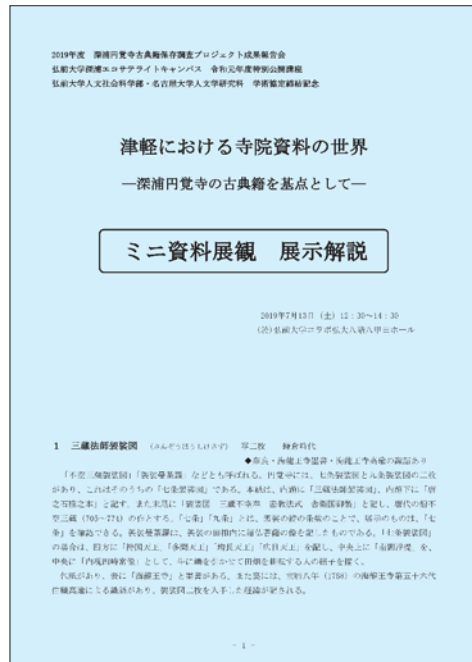
深浦円覚寺所蔵の貴重資料を、円覚寺から弘前大学の会場に運び、会場で展観し、解説資料を配付した。来場者には、フォーラムの前後の時間、休憩時間を利用して、円覚寺所蔵の貴重な鎌倉期写本、真言関係資料や修験資料、朝鮮版など様々の本を、実際に見ていただいた。また、展示資料を配布した。

展観した資料は以下の通りである。

- |    |  |     |              |
|----|--|-----|--------------|
| 1  | 三蔵法師袈裟図                                    | 写二枚 | 鎌倉時代         |
| 2  | 大師御行状集記                                    | 写一冊 | 鎌倉時代         |
| 3  | 秘蔵記  | 写一冊 | 鎌倉時代         |
| 4  | 一行禪師字母表                                    | 写一冊 | 鎌倉時代         |
| 5  | 大師執筆法                                      | 写一卷 | 享保十三年（一七二八）  |
| 6  | 書籍献納願                                      | 写一冊 | 明治二十四年（一八九二） |
| 7  | 修験宗教義書及自著ノ年月著者姓名録                          | 写一冊 | 明治時代         |
| 8  | 修験道峯中火堂書（上下）<br>・津軽弘前大行院、津軽深浦見入山善寿院永道の奥書あり | 写一冊 | 慶応元年（一八六五）   |
| 9  | 深浦潤口観音由来建立記                                | 写一枚 | 江戸時代         |
| 10 | 諸尊法伝授切紙目録                                  | 写二通 |              |
| 11 | 龍神秘法                                       | 写一枚 | 文政四年（一八二一）   |
| 12 | 乗船大事                                       | 写一枚 | 文政五年（一八二二）   |
| 13 | 産ヲ延詰ノ秘符                                    | 写一枚 | 文政四年（一八二一）   |
| 14 | 変成男子極秘                                     | 写一枚 | 文政五年（一八二二）   |
| 15 | 易産符・易産大事・産ヲ延べ詰メ之秘符・変成男子秘大事                 |     |              |

- 16 仁王経法 写一冊 慶應元年（一八六五）尊岸六十三歳写  
 ・寛政十三年（一八〇一）最勝院・密乘院兼席権僧正朝胤  
 ↓弘前八幡宮社内高賀山正伝寺大善院住職之御 鑲堯  
 ↓文政五年（一八二二）大円寺鑲堯法印↓尊岸（二十歳）
- 17 聖天講式 写一冊 慶応三年（一八六七）尊岸六十五歳写  
 ・岩木山百沢寺寺庵福寿坊／金剛山最勝院院代法船房寿海↓尊岸
- 18 兵法虎之巻 写一冊 文久二年（一八六二）尊岸写  
 ・京都・山科毘沙門堂／東京・東叡山寛永寺／長野・善光寺
- 19 摩利支天神鞭法 写一冊 天保七年（一八三六）尊岸授与  
 ・松前阿吽寺法印寛山↓尊岸
- 20 飛行自在之法・不断求聞持大事・夢違之大事 三宝院流秘事 写一冊  
 文政五年（一八二二）尊岸写  
 ・東京・武州江戸足立郡浦和／南部永福寺  
 ・京都・醍醐三宝院
- 21 修験宗 神道 神社印信（甲・乙）  
 甲・乙 各写一冊 甲本 文政七年（一八二四）尊岸写  
 乙本 慶応三年（一八六七）尊岸再写
- 22 修験道十八箇警策 嘉永二年（一八四九）尊岸写  
 尚書 刊二冊 ・弘前「稽古館」刊
- 23 格物探原 刊三冊 明治九年（一八七六）刊  
 ・「弘前基督協会の朱印あり」
- 24 圃隱集 刊三冊 朝鮮版  
 原刊記、正統四年（一四三九）刊、萬曆年間の再版行本
- 25 忠烈実録 刊一冊 崇禎二〇七（一八三四）年刊  
 ・朝鮮版、「京城陳列所」と記した郵便の帯あり

実際に見た方からは、「円覚寺は知っていたが、このような古典籍があることは初めて知った」などと、驚きの声があがっていた。一方、「会場が混みすぎていて、近くで見られなかった」、「狭くて混んでいて、見に行けなかった」と残念がる声も聞かれた。



(3) 来場者からの感想  
 来場者にはアンケートを記していただいた。その中から、感想を挙げる。

- 〔御法楽〕
- ・津軽仏教会のみなさんによる御法楽の実演は素晴らしかったです。気持ちも鎮まり、落ち着いた気分です。ありがとうございました。
  - ・御法楽は初めて拝見・拝聴したので、大変貴重な体験となりました。ありがとうございました。
  - ・御法楽は初めて聞いたので、とても心に響きました。
  - ・普段絶対に聞くことができない御法楽を目の前で聞くことができたの
- (七〇代、五所川原市)  
 (六〇代、弘前市)  
 (六〇代、弘前市)

が印象に残った。

(二〇代、弘前市)

### 〔展示について〕

- ・会場後ろに展示した資料をもっとゆっくり見たいので、できれば期間を決めて、弘前大学資料館に公開していただければありがたいです。

(八〇代、弘前市)

### 〔講演など〕

- ・とても有意義で内容の濃い取り組みに参加したものと大満足と思えました。専門分野の先生方の方向性を確認させていただき、大変な研究成果がもっと広く伝えられることを期待したい。

(六〇代、弘前市)

- ・深浦・円覚寺・津軽・中央諸寺との関わり・歴史を、図版も交えてわかりやすく解説していただき、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。色々な切り口からのご研究、益々のご発展を期待しています。

(五〇代、弘前市)

- ・深浦円覚寺の重要性と弘前のつながり等を知り、今まで長い歴史も知り得た感じでうれしく思います。

(六〇代、弘前市)

- ・鱒ヶ沢・深浦に九年間勤務したのでとても興味があり参加しました。内容が濃くて、時間の経つのが早く感じました。帰ったら再度資料に目を通したいと思います。

(六〇代、弘前市)

- ・子供のころからよく行っていた円覚寺が歴史的に重要な場所だということを知っていましたが、津軽の中での深浦の位置づけであったり、知のネットワークの中心であったことは、今日のお話で初めて知り、さらに興味を持ちました。まだまだ新しい発見がありそうなので、今後の調査結果にも期待しています。

(四〇代、弘前市)

- ・三者三様の講演が、それぞれカラーがあって対比が面白かったです。

各先生の講演は、段々と深浦↓津軽↓日本と広がっていくので良かったです。

(四〇代、五所川原市)

- ・弘前大学深浦エコサテライトキャンパスという取り組みを今まで知らなかったが、地域の人々とも深く関わりを持つ、とても良い取り組みだと思った。寺院の古典籍から津軽のを知ることができてとても面白かった。

(二〇代、青森県内)

- ・地元については、あまりにも日常的で、その価値を問うことがないため、それに対して、地元大学が学術的な目で光を当てる、とてもありがたいと思います。地元を誇りに感じ、かつ地元にもそのような大学があること、先生がいることを誇りにも思います。

(六〇代、弘前市)

- ・普段聞くことのできない貴重なお話を聞かせていただきました。初めて知ることだらけで、大変勉強になりました。ありがとうございました。

(二〇代、黒石市)

- ・津軽地域における歴史について、円覚寺に所蔵される古典籍を通して次々と判明されていく行程が楽しかった。これからも事業を継続して解明し、報告会を開催することを希望します。

(四〇代、弘前市)

- ・とても内容の濃い講座でした。それぞれの講座で、少々時間が足りなかったように思いました。今後調査が進んだ際に、またこのような企画をしていただければと思います。

(五〇代、青森市)

- ・いつの時代に、どこの誰が、どこの誰とつながりを持って、それが残されたものに現れているとのこと。興味深いお話でした。

(六〇代、弘前市)

- ・津軽の地理と深浦の地理を深く知ることができました。円覚寺がどんな寺かや、古文書の調査に触れる機会があることで愛着が湧きました。深浦にも赴いて、自分の目で確かめてみたいですね。

(二〇代、弘前市)

- ・円覚寺所蔵の古典籍のあらましについて初めて知った。弘大と地域の



取り組みの具体例について知ることができ、興味深く拝聴した。小学生には古文書は難しいと思うが、興味を持つている子供がいることは、地域の資料を次の世代に引き継ぐ点で、重要だと思う。

(五〇代、青森市)

・地域の研究の掘り起こしに大変興味を持っています。講師の先生方の興味ある内容研究に感謝申し上げます。

(七〇代、弘前市)

・津軽についての興味がさらに高まりました。

(五〇代、弘前市)

・古いものを保存・研究するだけでなく、それから新しい価値を生み出す事の重要性を強調されたことが印象に残った。

(七〇代、弘前市)

来場者は、弘前市内の他、青森市、黒石市、五所川原市など、県内各地からお越しいただいた。また深浦町からの参加者も、数十名おり、関心の深さがうかがわれた。また来場者の世代も、若い世代が多く来場していた。特に高校生の来場は大変嬉しかった。

深浦円覚寺調査の成果報告であると同時に、弘前の寺院や歴史について、新たな視点で学ぶ機会を提供できたように思う。

深浦円覚寺は、参拝に訪れた人は多いようであったが、こうした古典籍資料や聖教は全くこれまで存在が知られていなかった。今回、深浦町に所在する円覚寺の所蔵資料であるが、弘前と深浦の歴史的に密接な関係も講演で学び、また資料がそれを裏付けることとなった。また貴重な写本群が、「深浦の」宝物ではなく、津軽青森にとっても貴重なものであり、ひいては日本の文化財として貴重であることを皆で共有した。

### 三、弘前大学深浦エコサテライトキャンパス 令和元年度特別公開講座／木造高校深浦校舎一年次 令和元年度地域探究講座の開催

#### (1) 概要

二〇一九年十二月一日(金)、円覚寺を会場に、「深浦の歴史と文化を学ぶ」という題で、弘前大学深浦エコサテライトキャンパス 令和元年度特別公開講座／木造高校深浦校舎一年次 令和元年度地域探究講座を開催した。高校一年生一六名の他、公開講座として開催したため、深浦町民五名の参加もあった。

当日は、円覚寺金比羅堂に、長机を並べ、座布団を敷き、お堂の中で、まるで昔の寺子屋を思わせる風情であった。高校生をはじめは緊張した面持ちであったが、次第に、円覚寺についての話に興味を引かれていく様子であった。

高校生は、ほとんどが円覚寺に参拝に来たことがあるとのことであったが、寺宝館内に入ったことがある者はほとんどいなかった。全体のプログラムは、以下のようであった。

弘前大学深浦エコサテライトキャンパス 令和元年度特別公開講座 木造高校深浦校舎1年次 令和元年度地域探究講座	
深浦の歴史と文化を学ぶ	
2019年12月13日(金) 13:30~ (於)深浦円覚寺	
プログラム	
1. 開会の辞	深浦町役場 教育委員会 伊東信氏
2. ご挨拶	円覚寺副住職 海浦誠観氏
3. 講座「深浦の歴史と文化を学ぼう」	講師 弘前大学人文社会科学部 教授 渡辺麻里子
4. 寺宝鑑見学	
(1) 講座「円覚寺の歴史と宗教」	講師 弘前大学人文社会科学部 渡辺麻里子
(2) 講座「円覚寺の御寺宝」	講師 円覚寺責任役員 海浦由羽子氏
5. 様々な古典籍——さわってみよう——	
6. おわりに	

まずはじめに、開会の辞として、深浦町役場教育委員会から伊東信氏が挨拶をした。次に、会場であり、和古書資料をご提供下さった円覚寺の副住職海浦誠観氏から挨拶を賜った。

挨拶の後、講座に移る。アシスタント講師の学生が自己紹介をし、続いて講義にうつった。弘前大学人文社会科学部教授・渡辺麻里子が「深浦の歴史と文化を学ぼう」という題で、円覚寺を中心に、深浦の歴史を説明した。また円覚寺の歴史や、本尊の観音についても解説を行った。

続けて、全員、席を立ち、寺内の見学に移った。本堂、寺宝館、薬師堂内厨子と、円覚寺責任役員海浦由羽子氏のご解説と共に、案内をしていただいた。御寺宝を直接見ながら「円覚寺の御寺宝」を解説いただき、専門的な内容をわかりやすく伝えてもらった。海浦さんの時にユーモアを交えたご解説に、高校生も大人達も、普段はあまり接しない仏教の世界や、深浦の歴史について、引き込まれていった。

一通り見学を終えると、また金比羅堂に戻る。再び席について、机の上に置かれた円覚寺の所蔵の古典籍を直接拝見した。目の前の和本に、生徒たちはとても興奮した様子であった。緊張しながらも紙をめくっていくのは、大変良い経験だったことと思う。生徒たちは、それぞれ思い思いに楽しみ、学びを深めていた。講座の最後に、深浦町役場教育委員会伊東信氏の閉会の辞で会は終了した。

## (2) アンケートから

講座の修了後、生徒や参加した町民の感想をアンケートに記していただいた。その中からいくつかを、以下に紹介する。

### 〔生徒の感想〕

- ・ 深浦の歴史や文化にふれることができて、とても楽しかったです。
- ・ 深浦に住んでいるのに、初めて知ったことがたくさんあったので、と

ても勉強になったし、また来てみたいと思いました。

・ 古い本や、何年も前の作品を詳しく見ることができて本当に良かった。驚くことばかりでとてもいい思い出になった。

・ 円覚寺がこんなにも歴史が深かった事を、初めて知ることができました。

・ 深浦町に、日本に一つしかないものがあったのでスゴかった。

・ 文化について深く考えて、知るといのは、最初はすごく嫌だと思っただけ、実際に文化に触れてみると、本当に深浦の文化はすごく楽しいものなんだと思いました。

・ 今までに見たことがなかったことや初めて聞いたことなどをたくさん知ることができてとても楽しかったです。今まであまり興味を持っていなかったけれども、少し興味がわいてきて、良い講座になったなと思いました。

・ とてもいろんなことが学べて楽しかった。今後、県外の人に教えていきたいと思った。

・ 深浦や円覚寺の歴史について、よく知ることができましたし、日本の歴史に多く関わっていることがあったということもわかり、話を聞いて、楽しかったです。

・ 和本に触れることができて感動したし、色々な歴史を知ることができて楽しかったです。

・ 円覚寺には何回か来たことがあったけれど、より一層理解を深めることができました。和本に触れてみたのもとても楽しかったです。

・ とても興味深いものばかりで興奮しました。

・ 知らなかったことが知ることができたので良かったです。もし機会があったら、(深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトに)参加してみたいと思いました。

#### 〔町民の感想〕

- ・地元の貴重な円覚寺の歴史を改めて学ぶ機会を得て、有意義でした。プロジェクトに参加したいとは思いますが、現在は時間がなく、申し訳ない限りです。ありがとうございます。
- ・たくさんの本にさわってみたいです。
- ・深浦の歴史・文化や円覚寺の良さを、まだまだ各地に発信していくべきだと思います。
- ・見たことも無い部分も見て、楽しかった。季節的に、暑くも寒くもない時期がいいと思う。（\*当日はとても寒かったことを反映して）

生徒さんの感想や、町民の方の感想を見ると、円覚寺を通じて、さらに深く深浦のことを知って欲しいという目的はある程度達せたようである。今後、このような機会を設け、一人でも多くの深浦町民に、この調査のことを知っていただき、参加していただけたらと願っている。

#### 四、醍醐寺聖教調査団との合同調査の実施

二〇一九年一〇月一〇日〜一五日、円覚寺の本山である醍醐寺の聖教調査を行っている醍醐寺聖教調査団と合同で調査を行った。

醍醐寺聖教調査をまとめておられる永村眞先生をはじめ、『中世醍醐寺と真言密教』（勉誠出版）などの著書があり、醍醐寺調査を専門とされる日本女子大学藤井雅子先生以下、八名の調査員の皆様ははるばるお越し下さった。また醍醐寺聖教などを撮影されている写真撮影の業者の方々も遠路お越し下さり、合同特別調査の実施となった。台風の接近があり、一時実施が危ぶまれたが、台風は進路を外れ、無事に調査を行うことができた。

永村眞先生と深浦町吉田町長の懇談も行き、深浦町は調査団を大歓迎

した。マスコミも多数取材に訪れ、NHK、RAB、朝日新聞、東奥日報、陸奥新報の取材を受けた。（掲載記事、後掲）

醍醐寺聖教調査団は、中世箱・卷子本箱の真言聖教や、尊岸・義観など歴代住持の修験関係資料を中心に調査を実施した。調査カードを取り、弘前大学の調査に対して、様々なご指導をいただいた。

全六日間という長い調査の期間、様々な御教示を賜った。心より御礼を申し上げたい。弘前大学の調査団は、今後の調査に向けて、貴重なご指導を受けることができた。また写真の専門業者の方々には、はるばるお越しの上に撮影をしていただき、本調査報告書にも、素晴らしい写真の掲載が可能となった。

改めまして、大変お忙しい中、お越し下さり、様々なご指導を賜りましたこと、誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

#### 五、弘前大学人文社会科学部と名古屋大学大学院人文科学研究科との学術交流に関する協定の締結

二〇一九年三月二九日に、弘前大学人文社会科学部と名古屋大学大学院人文科学研究科との間に、学術交流に関する協定を締結した。協定の名称は、「国立大学法人弘前大学人文社会科学部と国立大学法人名古屋大学人文科学研究科との学術交流に関する協定書」という。この協定によって、両者の関係を緊密とし、研究活動、教育活動を協力して相互に活性化していくことをねらいとしている。

弘前大学人文社会科学部と名古屋大学大学院人文科学研究科は、もともと研究者間で、様々な共同研究が行われ、研究の連携が図られてきた。こうした学術交流を通じた協働事業に取り組む中で、多くの共通点に気付くこととなる。弘前大学人文社会科学部と名古屋大学大学院人文科学研究科は、両者が研究や教育の上で掲げる理念や、教育研究の活動方針に

は共通する点が多いため、今後相互に協力し、協働していくことでお互いに効果をあげていく方向を模索してきた。

例えば、弘前大学人文社会科学部は、グローバルな教育・研究の発展や国際的な情報発信を目指し、かつ地域の諸課題を共に解決する、地域への貢献に邁進し、教育の面では未来を担う、学生・院生の人材育成に務めてきた。それを具体的にするために、弘前大学人文社会科学部では、二〇一四年に「地域未来創生センター」を設立し、様々な教育・研究プロジェクトを遂行してきた。例えば、弘前藩藩校「稽古館」の旧蔵本を調査研究する藩校資料調査プロジェクトや本事業である、深浦円覚寺が所蔵する古典籍資料を調査研究する、深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクトなどを実行し、多くの成果を上げてきた。

一方の名古屋大学人文学研究科も、多くの理念を実現するために、二〇一四年四月に、名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センターを発足し、デジタルアーカイヴス等による人類の文化遺産の未来への継承や、地域に密着した調査研究による社会貢献、国際的な研究成果の発信、博士後期課程学生・ポスドクなど若手研究者の育成などを目指して活動をしている。

研究上の交流を深める中で、両者の研究協力の理念はまさに共通するところであり、ここで同じ目標を持つ者同士で協力し、より大きな成果につなげて行こうと考えるに至った。

協定書には、連携・協力する事項として、以下の事を挙げている。

- (1) 調査・研究活動の情報共有に関すること。
- (2) 研究者の相互交流に関すること。
- (3) 共同研究に関すること。

(4) その他、上記目的達成のため両者が必要と認めたこと。

今後、この協定を契機として、より一層関係を深めつつ、研究・教育への成果を上げていくことを目指している。

その第一歩として、先述したように、七月一三日に、弘前大学コラボ弘大八甲田ホールにて、地方寺院の資料の意義を考えるフォーラムを実施し、名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター長の阿部泰郎先生にご講演をいただいた。

今後、益々、両者の関係を深め、研究成果を挙げていきたいと考えている。

## 六、社会活動・教育活動としての意義

本プロジェクトにおいては、学術調査を、弘前大学学生（学部生・大学院生）も帯同し、調査の現場を経験することによる生きた学びを経験してもらっている。また深浦町の町民や、高校生にも参加してもらい、地域の文化財の保存活動として、協力していただいている。

学術研究を、専門の研究者だけで行うのではなく、地域の人々と一緒に活動することによって、地域の文化財についての理解を深めていただき、また地域への誇りを深めていただけたらと考えている。

調査に参加している町民のコメントは、本報告書に別途掲載したの御覧いただきたい。昨年度まで参加していた地域の高校生は、高校を卒業し、就職と共に地域を離れたため、調査に来られなくなったが、今はあとに続く高校生がまたやってくるのを待っているところである。

今回、エコサテライトキャンパス特別講義で興味を持った高校生もいるようなので、今後の参加を期待したい。

弘前大学の学生で、今年参加した学生たちの声を、以下、紹介する。以下のものは、弘前大学社会連携課が推進している「滞在型学習」として深浦調査に参加した学生たちの感想を抜粋したものである。

①学生A 大学二年生

先日は円覚寺古典籍調査に参加させていただき、ありがとうございます。先日は円覚寺古典籍調査に参加させていただき、ありがとうございます。

調査活動では修験道古典籍の撮影作業を担当させて頂き、貴重な資料に直接触れる機会に大いに恵まれると共に、複数の犬の字に囲まれる狐の字や、梵字などの記述も目にし、興味深く感じました。

また今回が初参加ということで、円覚寺の方にお寺の本尊や保管している宝物などのお話を聞かせて頂きましたが、中でも円覚寺における修験道が時代の流れにあわせて真言宗に名前を変えた話は興味深かったです。

禁止された修験道の資料を保管していたように、時代に迫られても、修験道の寺院だったことを完全に捨て去らなかつた人がいたことで、修験道の信仰が完全な謎の領域にならなかつたのだと知ることができました。文化資源学コースのカリキュラムを履修している生徒は、民俗学や文学の授業などで、近代日本での思想や信仰や言論の変革、それに伴う弾圧に触れたことがあると思います。近代の改革において、既存の価値観や習俗の中で政府の意図に反すると判断されたものは、禁止されたり放置されたり、捨て去られたりという歴史を辿ってきました。修験道も禁止されたひとつですが、深浦円覚寺のような場所で保存する動きがあったおかげで、かつての人々の修験道が、失われた空白の歴史になる事態から遠のいたのは、僥倖だったと感じ、印象に残りました。

これは個人的な印象ですが、政治的な動きがアクティブな中心地では修験道禁止のような社会の動きが急流となり、免れることは難しいが、そこから距離のある場所では残されていることもあるというのは、方言圏論の現象とも少し似ていると感じました。都や平地では時代と共に失われた言語現象が、高地の集落や地方などに局地的に残っている事例を、言語学で学んだ覚えがあります。

初参加で分からないことや知らないことが多く、先生や先輩方に質問してばかりでしたが、体験してみるだけでも今後の学習のモチベーションに繋がりました。また先輩方と話す機会が多く、そこでは大学生活における先人の知恵を見た気がします。

一泊二日の参加でしたが貴重な体験でした。また参加できればと思います。ありがとうございました。

②学生B 大学二年生

私は今回、古典籍の撮影を担当させていただきました。まだ二回目の参加でわからないことが多く、古典籍の撮影も今回が初めてでした。しかし、任せていただいた古典籍の量が多かつたため、たくさん経験を積むことができました。カメラの取り扱いや、撮影自体にも慣れることができましたので、次回からはもっとスムーズに撮影を進めることができると思います。

また調査中の雰囲気がとても良く、わからないところは聞きやすい環境ができていたため、参加回数が少ない人でも調査がやりやすいと思いました。

次回以降の調査も積極的に参加して、古典籍の撮影だけでなく他の作業もできるようにしたいと思います。今回も調査に参加させていただきありがとうございました。

③学生C 大学三年生

今回、深浦古典籍調査に初めて参加しました。まず、円覚寺を見学させていただきましたが毛髪刺繍や鬘額まげ、北国船の絵馬などの貴重な品を見ることができました。古典籍だけではなく、それらの品からも深浦の歴史を知ることができました。

そして、実際に古典籍を目にした時は、自分が想像していたよりもは

るかに多い古典籍が一つの場に集められていることに圧倒されました。現物の古典籍に自分が触れることで、紙の質感や文字の濃さ、表紙の装丁など写真だけではわからない情報を感じることができました。

古典籍を調査することで、本そのものの内容だけではなく、その本がどこから来て、いつ頃から存在しているのかわかるのは、地域の歴史を知ることにもつながると思いました。また、今は無い弘前の寺の資料についても当時の円覚寺の住職が残した資料からわかるというお話はとても興味深かったです。古典籍は様々な角度から情報を得られるのだなと改めて思いました。

今回は、古典籍を頁ごとに撮影をする作業を担当しました。こうして撮影し、記録を残しておくことで古典籍を持つ情報を多くの人に伝えることができ、その役割の一端を担えることを嬉しく思います。今回の参加で、古典籍の魅力をより一層知ることができました。

#### ④学生D 大学三年生（複数回参加）

今回の調査では、今まで体験したことがなかった「撮影」の作業に携わることができた。資料を綺麗に撮影するためには、紙のしわを伸ばしたりカメラに映るとき歪みを直したりといった調整をする必要があった。そのため丁数を数える作業よりも少し難しく感じたが、その作業をしていく中で資料の中身にも目を通せたように感じる。本文中には解読できるくずし字も結構見受けられたため、書かれている内容も気になった。このような資料を読めるようになるために、今後もくずし字の勉強を頑張りたいと思った。

撮影の作業をしていく中で特に印象深かったのは、卷子本の撮影を手伝えたことである。卷子本は博物館などで展示されているものを見る機会がほとんどであるため、こうして手に取れることは貴重な体験であると感じた。撮影のために間近で見ることができたこともよい経験になっ

た。よく観察したことによって、卷子本のつくりや辛うじて読める文字の存在を知ることができた。

また、今回も様々な資料を見ることができ興味深かった。中央に梵字が描かれた縦長の五角形の紙でお札を包んでいたものが、特に印象に残っている。宗教的な資料は形や大きさが様々であるように感じた。

#### ⑤学生E 大学三年生（複数回参加）

今回の調査では主に書誌カード取りをした。『論語』や『孟子』をはじめとする江戸時代の版本を中心に調査したが、印記・刊記・署名などをカードに記入する際に判断に迷うことが何度もあったので、回数を重ねて経験を積む必要があると感じた。

このようにカード取りではその難しさを体感したが、本を実際に開くことで今までは気がつかなかったことに気づいたときもあった。例えば、印記一つとっても、出版したところのものと思われるものや海浦家のものがあり、印が押されている場所も巻首から巻尾まで様々であった。これらの印記を見ることで、実際に人が所持していたことや、本が現代のように機械ではなく人の手で作られていることを改めて実感した。

個人的に、自分でカード取りをした和本の中で印象に残ったものは『本朝通記』だった。普段見る「全集」や「大系」には入っていないものだったので、新鮮だった。また、書誌カード取りはしなかったが、卷子本や朝鮮版を実際に見て触れることができたことは貴重な経験になった。

このほか、今回の調査には二年生や初参加の人がいて、調査の参加者が増えていくことを実感した。私が卒業するまでに調査が終わることはないと思うので、今後も新しい参加者が増えて調査が活発になってほしいと思った。

次回以降も日程が合えば参加したい。その際は一度も経験したことが

ないデータ入力をやりたい。

⑥学生F 大学三年生（初参加、エコサテ特別講座に参加）

円覚寺は、一、二回お参りしたことがあっただけで、その詳しい歴史や所蔵する文化財についてはよく知らなかった。（寺宝館の存在も、今回初めて知った。）しかし今回、円覚寺の中に実際に入り、案内や説明をしていただく中で、これほど多くの貴重なものと歴史があるお寺なのだということを知り、正直、とても驚いた。家族に円覚寺の話をしたところ、深浦によく行っていたはずの父も寺宝館のことは知らなかったようであった。

毛髪刺繍の仏涅槃図（当時の皇后様の髪の毛も使われているとのこと。この日一番の驚きであった）、薬師堂厨子とその落書き、三〇万字の梵字で書かれた供養の旗など、見ていて「ここにこんなに重要なものが!？」と感嘆してしまうほどであった。現在の深浦というと、どうしてもアクセスの不便な土地というイメージが強いのだが、これほど素晴らしいお寺があるのならば、もっと多くの人に「知っていただきたい」・「来ていただきたい」・「見ていただきたい」と強く思いました。今度は家族や友人たちも誘って参拝しに行きたい。

また、今回、実際のお寺で座学をして、中を案内していただいたのが寺子屋のような雰囲気と趣がありとても楽しく、その土地の歴史に対する理解もより一層深まるのではないかと感じた。実際のお寺で実地学習ができるというのはあまりない経験だと思う。そのような機会に恵まれている深浦の方や高校生が羨ましく感じる程であった。

深浦は幼い頃から度々訪ねていた縁ある土地であるが、まだまだ新しく知ることがたくさんあり、「楽しい」が詰まった一日であった。

このような機会をくださった先生、また深浦の方々には感謝の気持ちでいっぱいである。

学生の感想からは、それぞれの学生が、それぞれに様々な学びをし、経験を積んで成長している様子がうかがわれる。いつもながら、教員の方がこうあってほしいと望む以上のことを学生たちは吸収し、学び取っている。またこれらの感想からは、こうした調査への参加経験が、様々な効果を生んでいることに気づかされる。

今後も、学生たちに積極的に参加してもらい、学んでももらえればと思う。またこうした大学生の参加が、深浦町にとっても良い刺激になっているのではないかと感じる。

学生たちは、勉強に、サークルや部活に、アルバイトにと忙しくなかなか調査に定着する学生が増えないので、今後も積極的に参加する学生たちを増やしていきたい。

### おわりに

今年度は、多くの展開があった年である。三月に「名古屋大学文学研究科人類文化遺産テクスト学研究センター」を所管する名古屋大学大学院文学研究科と弘前大学人文社会科学部とで学術交流の協定を調印した。七月には、弘前大学において、深浦円覚寺所蔵古籍を基点として、フォーラムを行い、弘前市民、青森市民などに向けて、広くその意義を伝えた。

また十月には、醍醐寺聖教調査団との合同調査を実施し、地域における話題となった。またお忙しい中、調査にお越しいただいた先生方から、様々な御教示をいただいた。

十二月には、弘前大学深浦エコサテライトキャンパス特別公開講座を開催し、高校生や深浦町民に、円覚寺や深浦の歴史や文化を学ぶ機会を設けることができた。

これらの活動を通じて、弘前大学の学生も、地域の文化財と関わり、また地域の皆さんとも交流を深め、貴重な勉強をさせていただいている。昨年まで、様々に取り組んできたことが、今年は、色々な点で、発展させることができたように思う。

今後、研究を深化発展させることはもちろんであるが、市民調査団という運営方式を、さらに充実させ、「青森モデル」として、他の地域に対するモデルとしていけるように確立させていくこと、大学生や高校生への役割を明確にし、継続的な運営ができるようにしていくこともまた目標である。

また円覚寺古典籍は、文化財としては未指定のものなので、いずれ町や県の文化財指定を受けられることを視野に、調査研究を進めていきたい。また同時に将来に向けて、このような文化財をどのように伝えていくかを、地域の皆さんとともに、考えていきたいと考えている。

ここまでの皆様方のご支援に深く感謝申し上げます。また今後も関係各位には、さらなるご協力・ご支援を賜りたく、お願い申し上げます。

【調査に参加した皆さん】敬称略、順不同

二〇一九年四月～二〇二〇年一月まで

◇弘前大学（教員）

・尾崎名津子・武井紀子・荷見守義・原克昭・渡辺麻里子

◇弘前大学（学生）

・山村優、工藤亜衣、稲見ののか、田村優希、齊藤亘、渋谷ひな乃、他

◇深浦町役場

・伊東信、他

◇木造高校深浦校舎

・藤林美帆、中澤安里

◇木造高校深浦校舎

・一年生、他

◇深浦町民

・佐藤英文・佐藤英子・佐藤洋一・小角明・吉田秋光・須藤のぶ子・海浦由羽子、他の皆さん